

◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

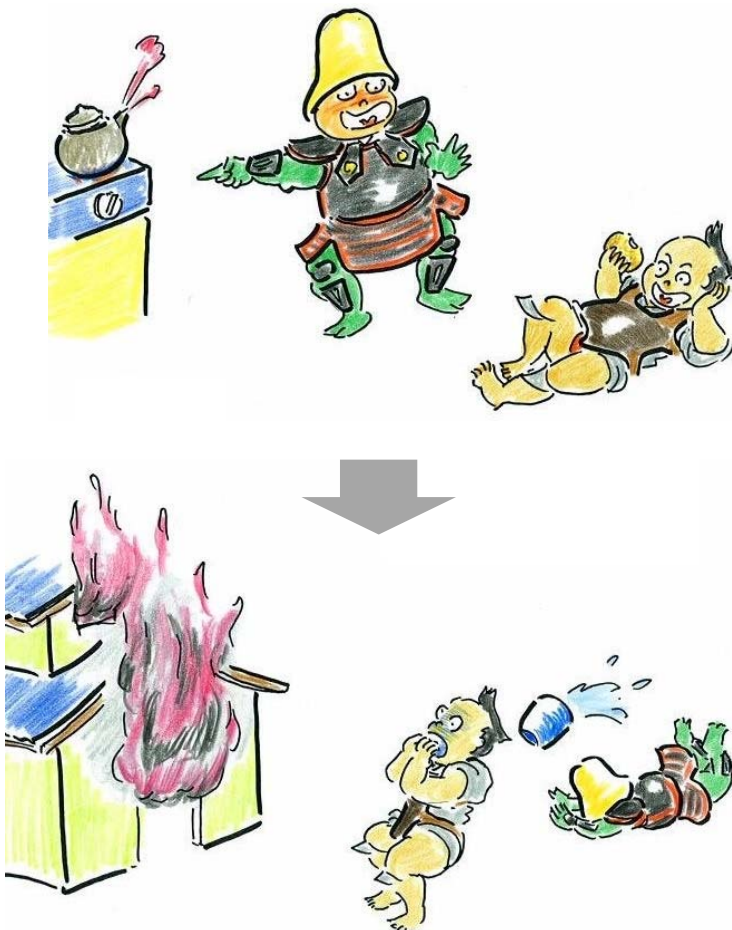
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん} には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.46

前号のあらすじ

給金が少ないと憤るご助に、過度の飲酒やギャンブルのし過ぎだ、とたしなめながらも、アイス奢ってやろうと隣地の田の畦道を歩く支援。途中、支援の言葉に怒り出したご助と^{いさか}諍いになり、二人は畦道で取っ組み合いを始めてしまう。

必殺技を繰り出そうと走り出したご助だったが、畦に置かれた虫追い棒に躓き枝豆林に倒れこんでしまう。支援の虫追い棒の嘘の使い方を信じたご助は、その夜、「あっしも追われるばかりじゃなく、たまには追う側となって旦那様を追いかけてやる。」と言いながら田んぼへと出かけたのじゃった。



ご助が田んぼに到着すると、既に沢山の人が虫追い棒に火を付け、周りの道や畦の上で勢いよく振っておった。

「おっ、もうやってやがらあ。早速あっしも。」と、ご助は虫追い棒を背中に立てると、先端の藁に火を付けようと、大きな^{かがり}火に近づいたのじゃった。



しかし、悪いことは出来ぬものじゃな、

「あちち、あちち、まだ、3尺（90cm）も先だってえのにこんなに熱いなんて。こ、こんな火で追われちゃ虫も旦那様も一巻の終わりだぜ。ひひひ。」と、

ほくそ笑みながらさらに一步近づいたご助の額に 『パチンッ』 と何かが
ぶつかって来たのじゃった。

「あ、痛っ」と額を押さえ、うずくまるご助の足元には一匹のカナブンが転
がっておった。



「いてててっ。な、なんでいきなりぶつかって来やがって・・・」と呟きながら、ご助は足元で仰向けになりながら必死に足を動かすカナブンを見下ろして

「カ、カナブン・・・？ た、確かエジプトではカナブン様は神の使いとか・・・

(※古代エジプトで神と崇められたのは、コガネムシ科のスカラベ(俗称フンコロガシ)で、カナブンとは異なる) ま、待てよ。も、もしかしたらこのカナブン様はあっしに虫の知らせを伝えに来られたんじゃない？まさか今からとっても悪いことが起きるんじゃないだろうな。」と、立ち上がって周囲を見渡したがその兆しは無く、

「だ、大丈夫だ、驚かさなくてくだせえよカナブン様あ」と気を取り直し、さらに篝火へと近づくと、今度は四方八方から^{いなご}蝗の大軍がご助を覆うように飛んで来たのじゃった。



どうやら、虫追いの炎に追われ、パニックに陥った蝗たちが逃げ場を求め、まだ火の着いていないご助の虫追い棒に群がってきたようじゃった。

「あ、痛え、痛えっ、あ痛たたっ、何だってんだ？」と、蝗の大軍に視界を失ったご助の体はフラフラと篝火の方へ

「危ないご助！」と、ご助のあとを追いかけて来た拙者の制止もむなしく、ご助の体は篝火の中へ・・・。

一斉に炎から逃げ出す蝗たちの羽音、一瞬の静寂のあと

「うぎゃああああっ熱い、熱い、アチチっ！み、水うっ」と背中で勢いよく燃える虫追い棒を担いだご助が篝火から飛び出し、哇道を猛烈なスピードで走りだしたのじゃった。



ご助の姿が見えぬ虫追いの参加者からは、燃える虫追い棒が空を飛んでいるように見えたのじゃった。

そして、宙を這うような虫追い棒の動きを見て

「おっ？ドローンかい？こっちじゃこっち。」と参加者の手招きする声に

「うぎゃあああ、そっ、そっちですかい？」 と水を求めて走るご助の悲痛な叫びが・・・。

漸く畦の角に到着すれば、更に奥から

「こっちじゃあ、こっち！」と別の声が・・・



「こっちじゃ」

「うぎゃああ！そっちですかい！」

「おおい、こっちじゃっ」

「うぎゃあああ・・・ま、まだですかあああい?!」 の声が延々と続き

やがて半刻（1時間）も経ったころ

「いやあ、ドローンを使うとは最近の虫追いも変わったのお、お陰で今年の虫追いは早う済んだ。良かった良かった、さあて帰るべ。」とロ々に引き上げる参加者の背に向けカチカチ山のタヌキのように背中にやけどを負ったご助が

「馬鹿ああああっ」と叫んでおったのじゃが・・・モチロン誰にも聞こえる
筈は無かった。

「くっ、くそが一ああ・・・」という叫び声を最後に、動かなくなったご
助に駆け寄った拙者は

「ご、ご助、大丈夫か？」とボロ雑巾をまとったようなご助を助け起こした
のじゃったが

「ああ、だ、旦那様。じ、実は虫追いを始める前にカナブン様があっしの額
にぶつかって来やしてね。も、もしかしたら、こいつぁ、悪いことが起きる虫
の知らせじゃねえかなあってね。あんとき引き返しておきゃぁ、旦那様、虫の
知らせって本当にあるんですぜ。」と、か細い声でしゃべる黒焦げのご助を眼
下に見ておるうちに、拙者の両腕は思わず知らずプルプルと震え出し、目に大
粒の涙が・・・。

「だ、旦那様・・・今生の別れじゃあるまいし、泣かないで下せえよ。これ
もあっしの日頃が業のなせる因果でござ・・・」と、続ける殊勝な言葉に拙者
はどうとう耐えきれず

「いーひひひっ、ばっかでえご助。やっぱりおのれは加州一の馬鹿者じゃったな。あはははは、お、お、お、おのれのは虫の知らせでのおて、『飛んで火にいる夏の虫』と言うのじゃ！」



「な、な、何を言いやがる！それが大事な家来に向かって言う言葉ですかいっ！旦那様とて許しやせんぜ。最前から、虫の知らせや虫の息とか軽々しく虫、虫と言うじゃねえですか！一寸の虫にも五分の魂って言うじゃねえか！やい！こちとら生まれも育ちも金沢よ！金城靈沢で産湯を使い・・・」と怒りだしたご助じゃったが

そのご助の足元で、ようやく腹這いの態勢に戻った^{くだん}件のカナブンが、ご助のつま先を節だった足でツンツンと、突いておるのに気づいたご助は

「な、なんでえうるせえなあ。今、でえじなところなんだからアッチへ行っ
な！」と、カナブン様を足蹴にすると

「えーと、どこまで言いやしたかね？」と拙者に聞くので

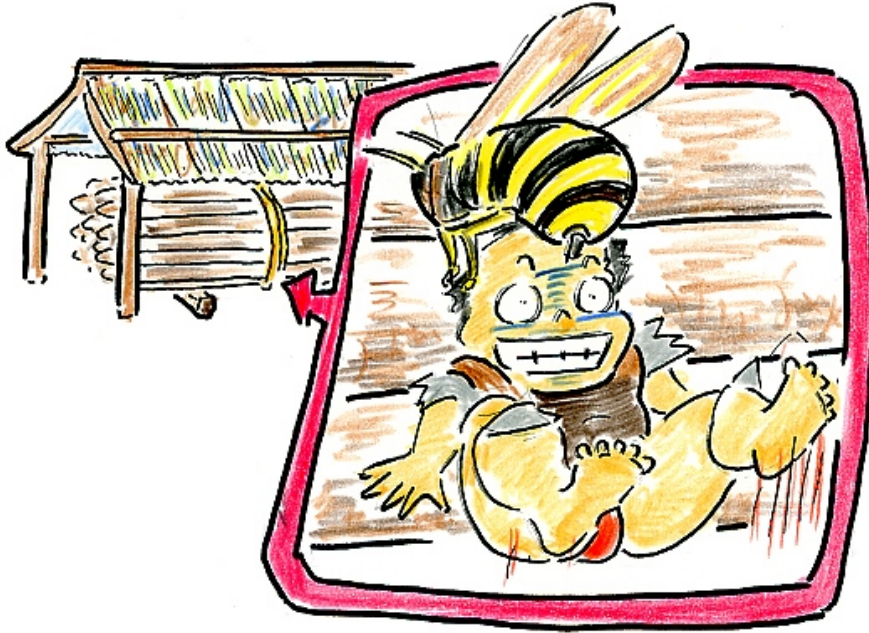


「金城霊沢で産湯を・・・からじゃ」と答えると

「そ、そうです！ 金城霊沢で産湯を使い・・・」と始めた時のことじゃ。

どこからかブーン・・・ブーンと飛んできた一寸（3 c m）ほどのスズメ
バチがピタリとご助の頭に張り付いたかと思うと、榎本美恵子ばりのキツイー
一刺しを・・・。

「うぎゃああああ?!」との断末魔の一声を残し、ご助は傍らの稲架置き場^{はさ}を背にして昏倒したのじゃった。

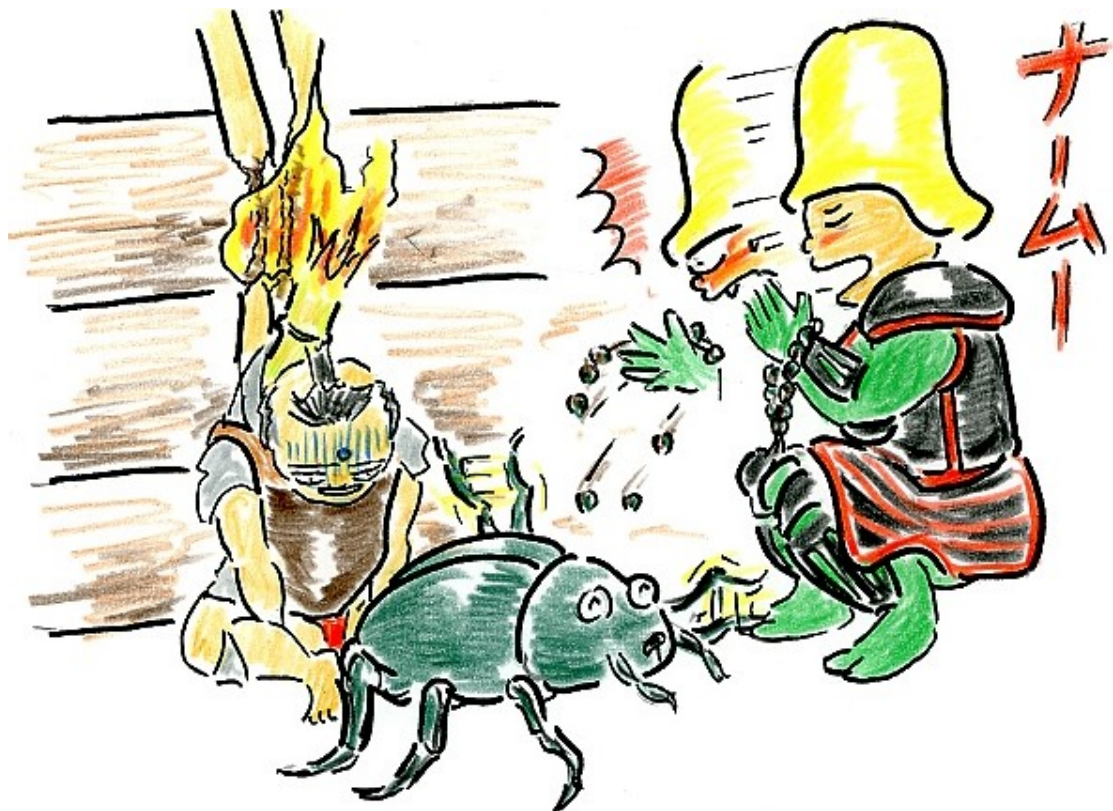


「・・・か、可哀そうにのお。啖呵の途中で・・・一寸の虫にも五分の魂とは良い諺を知っておったものじゃ。小さな者・弱い者でも、それ相応の意地や感情はもっているから、決してばかにしてはならぬという意味じゃが・・・あの一寸ほどのスズメバチは追い払われた虫たちの意趣返しに来たのじゃろう。ご助め、泣きっ面に蜂とはよく言ったものじゃが・・・可哀そうに。カナブン殿が必死で信号を送っておったのに最後まで虫の知らせが伝わらなかったようじゃな、残念、残念。」

と拙者は地べたに転がったご助に向け、合掌してから

「しかし、最後は鮮やかな蜂の一刺しじゃったな。うん、いやあ愉快的な夜じゃった。明日も良い天気、暑くなりそうじゃなあ……。さあてカナブン殿、一緒に帰って冷たいアイスでも頂こうかの？」と、カナブン殿を誘うとカナブン殿は拙者のつま先をツンツンしながら、もう一方の短い脚で必死にご助の頭の方を指し示したのじゃった。

「どうしたのかな、カナブン殿？」と、指（脚？）差す方を見ると、ご助が背にした稲架置き場からモクモクと煙が出ておるではないか。



「こ、これは大変じゃ！ご助の背の虫追い棒が消えておらんかったのか？！

伝統行事の虫追いで火事を出したとあっては防火の精の名折れじゃ！」と、

拙者が近くに転がっておった肥料の袋に用水の水を汲み、ご助の所へ駆け寄ったときじゃった。

“プツーン”という鈍い音を立てご助の背にした稲架を束ねる縄が焼き切れたのじゃ。

「ひいいい？！」という拙者の悲鳴の中に「うぎゃあああああ！」という、ご助の2度目の断末魔の悲鳴が合わさり、その悲鳴は 『ドドドドーン』 という稲架の崩れ落ちる音にかき消されたのじゃった。

崩れ落ちた稲架の下、遠のく意識の中で拙者が見たのは、スズメバチとコガネムシがハイタッチしながら

「うまく行きましたね、追われた仲間の意趣返し」と言うスズメバチに

「本当に。虫の知らせに鈍い二人で良かったわ。」と言うコガネムシの姿じゃった。



「おのおの方。虫追いは、火事にならんよう、正しく行って下され。拙者からのお願いでござる・・・」と言い終え、拙者は気を失ったのでござる。

(おしまい)